

都市革命？

ニール・ブレナー *

(平田周 **・仙波希望 *** 訳)

初出：Neil BRENNER, “Introduction: Urban Theory without an Outside”, in *Implosions / Explosions: Towards a Study of Planetary Urbanization*, ed. Neil BRENNER. Berlin: Jovis, 2014, pp. 14-31.

加筆・再掲：Neil BRENNER, “Urban Revolution?,” *Critique of Urbanization: Selected Essays*, Basel: Birkhäuser, 2016, pp.192-211

都市問題は、都市や都市化の過程の性質を扱う研究者たちのあいだで、ながらく激しい議論の火種となってきた。方法論、分析の焦点、政治的方向性における大きな違いにもかかわらず、この問題に対する20世紀の主要なアプローチは、分析や調査地の基本単位として、都市（あるいはそこから派生する言葉に違いはあれ）と一般に名づけられる存在を取り上げてきた。

こうした認識論の焦点は、シカゴ学派の創設者であるアーネスト・バージェスとロバート・パークによる1925年の都市社会学の宣言書のなかで正典となった。その宣言書は簡潔だがはっきりと、『都市』と題されたのである^{原注1}。ただの力点だったものが、都市研究の様々な流派を超えた自明の前提となる。それはあまりにも明らかなため、以後そのことに関する説明は不要となる。実際、20世紀中頃から後半にかけて生まれた主要な都市社会学の潮流は、シカゴ学派の都市社会学と大きな隔りがあるにもかかわらず、そうした潮流は同様に、唯一とは言わないまでも優先されるべきものとして、「都市的な」（結節点であり、比較的大きく、人口密集し、閉鎖性をもった）社会空間の単位に分析の視点を定めた。こうした学派間に特有の方法論的・政治的課題が何であれ、都市問題へのあらゆる主要なアプローチは、(a) より広い領域を横断した都市的な居住類型のコピーを記録するか、(b) 商業的、産業的、フォーディスト・ケインジアン的、ポスト・ケインジアン的、グローバル、メガ、新自由主義的、日常的、ポスト植民地主義的といった都市を形容する修飾語を用いるかのいずれかであった。結果として、これらのアプローチは、一部のより一般的な社会空間の形式と呼ばれるもの、「いわゆる」都市として研究領域を画定するのである。

もちろん、問題となる都市的な単位にラベルを

貼るべく売りに出された多くの用語が存在してきた——メトロポリス、都市圏、都市地域、大都市圏、メガロポリス、メガロポリタン・ゾーンといったように。そしてこれらの用語は、いみじくも刻々と変化する人間の居住パターン境界、形態、スケールを反映する。それと同時に、都市理論と都市研究の主要な学派の内部でも外部でも、都市形成の起源、原動力、帰結に関する議論、より一般的には、もっと広範な政治経済的、社会文化的、人口統計的な変化に関連した都市機能に関する議論が長きにわたって盛り上がってきたのである。しかし、喧々譁々の様相と絶えざる一連のパラダイム転換のもとでも、基本的なコンセンサスは存続していた。つまり、都市的な問題設定は、根本的に都市において具体化されるべきものと考えられているというのである。この場合の都市とは、(多数の人口、密集度、社会的多様性といった) いくつかの指標に特徴づけられる居住類型として考えられている。これらの指標は、都市を都市ではない (non-city) 社会領域 (郊外、田園、農村地方、野生地) と質的に区別することを可能にし、非都市 (non-city) という社会領域は、一般的に都市の「彼方」ないしは「外部」に位置づけられているのだ。

私が最近の研究で試みたこと、そして、クリスチャン・シュミットや他の研究者たちの共同作業を通じて、私たちは、地球の風景への都市過程の刻印と操作性 (operationality) を概念化する根本的に異なる方法を展開させつつある。私たちの目的は、境界づけられた居住類型や結節点としての都市的なものに関する既存の理解を乗り越えて、多様なスケールをもち、領域的に分化され、形態的に変化に富み、厳密に手順を踏んだ概念化を選びとることにある。いくつかの根本的な認識論的かつ方法論的な帰結は、このような方向づけを再設定することから生じる。と

* ハーバード大学デザイン大学院
** 南山大学
*** 東京外国語大学大学院

りわけ、都市に関する理論、研究、実践の分野全体にながら根を下ろしてきた都市的なものと非都市的なものとの分割を乗り越えるという方法的な要求が重要なものとなる。

内破と外破

なぜ都市的なものと非都市的なものの区別が乗り越えられなければならないのだろうか。そして、なぜ今そうしなければならないのだろうか。明らかに、居住空間は、長いあいだ場所の名前によって差別化がはかられてきた。そして、歴史的にも今日においても、ロンドン、ニューヨーク、深圳、ムンバイ、ラゴスといった世界の大都市を基準にして、都市的なものの領域を画定することは、直感的に理解できるように思われる。加速する地理経済のリストラクチャリングと結びついた激しい変動のただなかにあるにもかかわらず、こうした場所は疑いもなくいまだに存在しているし、事実として、そのサイズと戦略的な経済的重要性は、減ずるところか高まっているように見える。だがこれらの場所は、政府によって制度化されて成長を至上命題とするエリートたちの連合 (growth coalition) から優良な投資先として評価された地図上の名前であることを別にすれば、一体何であるのか。何がこうした場所を、例えば、イングランドや西ヨーロッパの東南部およびアメリカ合衆国の北西部や北米地域の内外にある他の場所と質的に区別されるものにしてしているのか。このような場所には、自らを唯一無二のものにする何か特別な性質があるのだろうか。もしかするとそれはそれぞれの場所のサイズなかもしれないし、人口密度であるかもしれない。あるいは、インフラストラクチャーの支出額だろうか。資本と労働のグローバルなフローにおけるそれぞれの場所の戦略的な中心性だろうか。さもなければ、他方ではもしかすると、かつてこうした場所の単位に収まっているようにみえた都市生活の社会空間的な関係が現代ではそうした単位を超えて、今日地球上を縦横に走るいっそう分厚いコモディティ・チェーン、インフラストラクチャーの回路、移民の流れ、そして物流ネットワークを通じて、やみくもに増大したのだろうか。

しかし、もしそうだとすると、いかなるサイズであれ、どんな都市も一貫した境界を有すると述べることは依然として可能なのだろうか。日常の社会的諸関係、企業間のネットワーク、労働市場、建造環境、インフラストラクチャーの回廊地帯、そしてこのよ

うな高密度の集合体^{クラスター}と結びついた社会環境の範囲は、いまや拡大し、分厚くなり、重ねられ、相互に編み込まれ、ナショナルなスケール、インターナショナルなスケール、大陸のスケール、そしてグローバルなスケールでも、かつてジャン・ゴットマンが「田園と郊外の景観が不規則にコロイド状に混ぜ合わされている」と活写したものを築き上げている^{原註3}。だとすれば、こうしたすべてが実際に生じている段階で、区別された居住類型としての都市的なものに関する従来の理解は放棄されるべきか、さもなければ少なくとも根本的に概念化し直されるべきではないか。

これこそが、四〇年以上前にアンリ・ルフェーヴルによって提起された立場であった。当時ルフェーヴルは古典的なテキスト『都市革命』の冒頭に次のような挑発的な仮説を置く。「社会は完全に都市化されている」^{原註4}。ルフェーヴルは、完全な都市化を潜在的な対象——実現された現実というよりも新しい状況——とみなしていたのだが、彼は都市化の完全な形成についての大筋が、西洋では1960年代を通じてすでに浮き彫りになりつつあったことを示した。このような見立ては、伝統的なヨーロッパの都市の断片化や破壊のうちに明らかにされているとルフェーヴルは論じる。つまり、イングランド、パリ、ルール地方からスカンジナビアに広がる大規模な領域を有するメガロポリスの編成のうちに。そして、かつては遠く離れていた地域にまで浸透する物流、商業、旅行のインフラストラクチャーの拡大のうちに。または、フランス、スペイン、イタリアのかつては周辺だった場所における主要な工業団地や大規模な住宅団地の建設のなかに。さらに旧田園地帯においてはほぼ自律的であった農村共同体の破壊のうちに。最後に大陸を横断する環境破壊の広範な過程のうちに^{原註5}。こうした傾向が地球規模のスケールで実現されたとき、この傾向は、世界全体を横断して、断片的だとしても絶えざる都市の織り目 (urban fabric) ——不均等なメッシュ——の編み込みを伴うことになる。ルフェーヴルは示唆した。こうした世界には、地球の表面、流域、地層、大洋、大気圏が含まれ、それらすべてが資本主義的な産業成長の貪欲な追求を支援するためによりいっそう直接的に操作されることになる^{原註6}。結果として、郊外、外郊外、田園、野生地、あるいは他の非都市地域と見なされる領域と対比して、都市的なものを居住空間の異なる類型として考えるよりも、資本主義的な都市化は、今や地球の全表面を横断して広がる「様々な密度、厚み、活動」からなる複雑に積み重ねられ

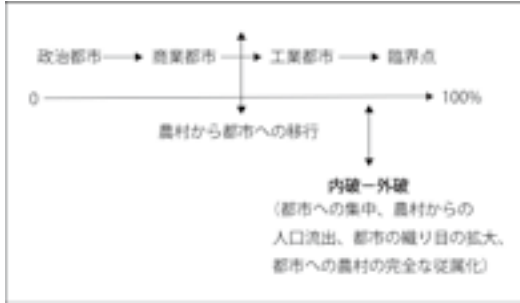


図1 ルフェーヴルによる完全な都市化のダイヤグラム [h1] た網の目としてよりよく理解できるということをルフェーヴルは論じたのである^{原注7}。

いくつかの印象的な定式化のなかでルフェーヴルは、資本主義的な都市化が地球規模で全般化していくことを「内破と外破」の過程として特徴づけた。この表現をルフェーヴルが導入したのは、集積の資本主義的な形式と領土、景観、環境のより広範な変化とのあいだの相互に再帰的な関係を明らかにするためである。『都市革命』の冒頭の章で提示された、挑発的で幅広い議論を呼び起こしたダイヤグラムのなかで、ルフェーヴルは、内破と外破の概念を用いて、世界のスケールで完全な都市化が始まったことを示すことになると考えた歴史地理的な諸変化——とりわけ、「都市への集中、農村からの人口流出、都市の織り目の拡大、農村地域の都市地域への完全な従属」——の広範な布置を記述したのである。

ルフェーヴルが想定していたのは、この「臨界点」に達したとき、完全な都市化の状況はもはや仮説、つまり単なる「潜在的な対象」ではなくなるであろうということであった。潜在的な対象の傾向は、ヨーロッパであれ他の地域であれ、個々の領土において選択的に明らかとなる傾向をもつ。むしろ完全な都市化は、地球規模の社会的かつ環境的諸関係にとっての基礎的なパラメーターとなっていたのだろう。なぜならば、それは、世界の建造環境および手つかずの環境の使用、領有、変化に対して新たな制約を課し、潜在的にカストロフィックな不平等、葛藤、危険を解き放つだけでなく、あらゆるスケールの空間の民主主義的な領有、占有、自己運営の新たな好機を含んでいるからである。1980年代後半、晩年のテキストのひとつで、ルフェーヴルが想定していたのは、完全な都市化の臨界点——より以前の彼の有名な著作のタイトルである「都市革命」——はすでに過ぎ去り、それゆえ「都市的なものの地球化」が今や実際のものとして理解されつつあるということであった。

ルフェーヴルの仮説は、H・G・ウェルズやJ・G・バラード、アイザック・アシモフのような作家たちのディストピア的なサイエンス・フィクションに見られるファンタジーに似た、地球上の人口爆発に関するヴィジョンとしてしばしば誤って解釈されるか、さもなければ戯画化されてきた。こうしたファンタジーで描かれる地球は、延々と続くブロックの垣根やうず高く建てられた鉄かコンクリートのインフラストラクチャーである。しかし近年になって、世界の都市革命というルフェーヴルの考えは、21世紀初頭の都市化の過程と結びついた空間の不平等発展に関するいくつかの新たなパターンと経路を解説しようと努める、批判的な都市の理論家たちによって生産的に再活用されてきた^{原注9}。例えば、ルフェーヴルのいくつかの考えを踏まえて、ラディカルな都市理論家・批評家であるアンディ・メリーフィールドは、世界資本主義の蓄積戦略によって不均等に統合されながらも高度に都市化されたメッシュのなかでかつての田舎が道具化されると同時に変化させられる事態として、プラネタリー・アーバニゼーションを解釈している。

世界の都市化とは、ある種、内部の外面化であり、外部の内面化でもある。都市が田舎へと広がるとき、田舎もまた都市へと折り返してくるのだ。(中略)しかしながら、これらふたつの世界の分断線は、都市-農村、南-北というような、いかなる単純な対立によっても定義されえない。そうではなく、中心と周辺は、資本蓄積そのものに、その「資本の第二次循環」に内在する。(中略)そのとき、中心は自身の周辺を生み出しつつ、その双方を危機に陥れる。これら2つの世界——中心と周辺——は、あらゆる場所で隣り合い、互いをがんじがらめにする。(中略)農村の場所は、漠然とした単位に吸収され消し去られるなかで、ポスト工業的生産と金融投機の不可欠の部分へと組み込まれ、「都市の織り目」へと呑みこまれた。それは、絶えずその境界を押し広げ、かろうじて残された農村生活を蝕んでゆく。こうして、あらゆるもの、あらゆる場所が、剰余価値の増大、資本の蓄積という目的のために貪り尽くされたのである^{原注10}。

こうした地球規模に拡大する都市状況という不均等に課された桎梏において、資本主義的な都市化の巨大な生産工程、インフラストラクチャー、政治的生態は、高度な密集地域や複数の中心を有する大都市圏のなかにもはや押しとどめられているわけではない。かつては、大都市圏が、一般に農村の存在の

ような「外部」領域とみなされるもの、つまり「非都市」という広大な手つかずのブラック・ボックスと対置されることができた。いまやうってかわって、都市化の資本主義的な形式は、旧来の都市と農村の分割線を徐々に横断し、飲み込み、それにとって代わり、地球の全表面のいたるところに広がり、さらに地中や大気圏にまで拡張しているのだ。結果生じる操作的景観 (operational landscape) は、都市生活を支援し下支えする重要な産業、物流、新陳代謝上の操作のために相互に編まれた地球規模の社会的な技術インフラストラクチャーによって構成されている。こうした都市生活には、資源採取、燃料とエネルギー発電、農業的・工業的生産と生息地の領有、輸送とコミュニケーションだけでなく、飲料水の供給、廃棄物処理、環境管理が含まれる^{原注11}。このように理解すれば、プラネタリー・アーバンゼーションは、普遍的な空間形式としての「いわゆる」都市を一般化したり、さらには初期の多くのグローバリゼーションの推進者たちによって思い描かれたような「ボーダレスな世界」を確立するというよりも、様々な場所、領土、スケールの内外で不均等に相互依存、分化、格差の広がりを拡大するものとなる。

明らかに、今生じつつあるプラネタリー・アーバンゼーションの形成は、長い間定着していた空間の境界とイデオロギー的な二項対立を曖昧にし、さらには打破しつつある。つまり、都市と農村、都市的なものと農村的なもの、中心と周辺、本国と植民地、社会と自然、人間と非人間だけでなく、都市のスケール、リージョナルなスケール、ナショナルなスケール、グローバルなスケールそのものの区分をも覆しているのだ。結果、プラネタリー・アーバンゼーションは、高密度にはあるが不均等に都市化された景観の新たな布置を作り出す。その景観の輪郭は、従来の都市の認識論を基礎にして理論化することが不可能ではないとしてもきわめて難しく、いわんや地図化することはいっそう困難である。このような展開は、現れつつある都市化のパターンと経路を解読し、理解し、形作ることに努めている都市設計家、計画家、デザイナーにとって大きな課題を提起する。都市理論の基礎的な概念文法とメタ地理学的な枠組みが、今日では多くが時代遅れのものとなった資本主義的な領土組織の時期から受け継がれているということを検討すれば、目まぐるしく変化する私たちの地球規模の都市状況の地理をより効果的に把握することのできるオルタナティブな「認知地図」の作成を試みる事が不可欠である^{原注12}。

都市化とその操作的景観

こうした差し迫った課題を提案し探求するとき、私たちの主張は、幾人かの都市設計家たちが折に触れて述べたように、都市(より正確には集積地域)がグローバルなフロー、無計画な人口分散、無定形なインフラストラクチャーのプラズマ、あるいはボーダレスな接続のなかで溶解する、といったものでは断じてない^{原注13}。また——現代資本主義のもとの都市性の現象に一般に結びつけられるごくわずかな条件を挙げるにとどめれば——、人口密度、企業間のクラスター化、集積効果あるいはインフラストラクチャーの集中が、現代の経済と社会ではもはや運営上重要な特徴ではない、と私たちは主張するわけでもない。まったく逆に、ここで提案されたアプローチは、集積過程、経済発展の体制のなかで変化するその過程の役割、形態、インフラストラクチャー、制度、人口統計、空間といったものの多様な配置における——広範なスケールを有する都市地域、複数の中心をもつ大都市圏、直線的な都市の回廊地帯から都市間ネットワークや世界都市の階層にいたる——その過程の多彩な表現と根底的に関わり続けている。しかし、こうした問題の配置を考えると、私たちの研究における主張は、「都市とは、都市化の形式に他ならない。それゆえ都市は、広範な社会空間および社会生態上の変化過程がダイナミックに展開する場や舞台であり、その過程の所産である。」^{原注14}。デヴィッド・ハーヴェイの簡潔な表現では、「『都市』と呼ばれる『もの』は『都市化』と呼ばれる『過程』の『結果』である」^{原注15}。

しかし一体どのようにこうした都市化の過程とそのまだらな地理を理論化するのだろうか。事実この課題は、多大なる挑戦を求めている。というのも、都市化という概念が、一見ダイナミックかつ段階的な性質をうちにはらむように思われたとしても、この概念は実際にはながらく方法論的都市中心主義、つまり都市は自明で、領域的に閉鎖的で、どこでも再現可能な社会空間の形式として扱われる方法論的都市中心主義という認識論的な前提に完全にはまり込んでいたのである。産業化、近代化、民主主義化、合理化のような他のメタ概念とともに、都市化の概念は、近代の社会科学と歴史学において長い歴史を有し、一般的には、現代資本主義の社会編成が全面的に浸透していくメガプロセスとみなされるもののひとつを引き合いに出すために用いられてきた。だが、たいていの説明では、都市化は、ただ都市の成長の過程を指すだけである。すなわち、定義からし

て、都市化は、一般的には資本主義的なモダンティにおける他のマクロなトレンドのいくつかと連動した、広大で、おそらく密度の高さや多様性を有する居住地の成長に触れるだけに限定されているのである。

その起源は、19世紀から20世紀初頭にかけての社会理論の様々な学派にまで跡づけられるかもしれないが、この都市中心主義的な概念化は、パラダイムとしては、総人口との関連での基礎となる都市人口の拡大という、アメリカの社会学者キングスレイ・デイヴィスが20世紀中頃に与えた都市化の古典的な定義において典型的に体现されている。デイヴィスは、社会、形態、機能に関わる用語で都市を定義するのではなく、都市の特性を居住類型として画定するために任意の数字上の人口の閾値——一般的に2万ないしは10万——を用いたことで知られている^{原注16}。デイヴィスはこの厳密に実証的な理解を次の定式に簡潔にまとめている。U=Pc/Pt (U=都市化、Pc=都市人口、Pt=総人口)。その後、デイヴィスは、その国際的な適用のための綿密な実証研究に数十年を捧げ、最終的には、都市人口規模の最初の包括的な世界調査を産み出したのである^{原注17}。

20世紀中頃にデイヴィスが与えた定義は、今日においても、国連 (UN) や他の国際機構によっていまだに用いられているデータ収集システムのなかで確固たるものとして制度化されている。そして、この定義は、現代の社会科学、都市計画、社会政策、公衆衛生の主要な学派においてもなお厳密に定着している^{原注18}。事実、いまや世界人口の五〇%以上が「農村」から「都市」に移住しているという広範な影響力をもつ現代の主張に根拠を与えているのが、この経験主義的かつ都市中心主義的な概念化に他ならない。標準化されていない国毎に異なる居住類型の定義が国連のグローバルなデータ表のなかに混在しているという点において、その経験主義的な盲点は、無視できないものである。それを脇におくとしても、私たちの研究は、このような命題が、現代の都市革命を理解するにあたって、ひどい誤解のもとになっていることを示している。それは、非歴史的なまま普遍化される人口中心な都市概念を前提にしており、この概念では、これまでに例をみないほどのスケールと、現在世界の主要地域で展開する集積過程の多様性を的確に把握できないのである^{原注19}。同じく重要なのは、五〇%の都市人口の閾値という考えでは、都市化の過程における広範な操作と影響を明らかにできないということである。この過程は、人々が集住する巨大な中心をはるかに超えて、資源抽出、

農業・工業の生産、森林地や放牧地、物流やコミュニケーションのインフラストラクチャー、観光事業、廃棄物処理、生態系サービスを包含する領域にまで展開している。これらの領域は、しばしば周辺の遠隔地にあり、一般に「田舎」や「野生地」と呼ばれる場所を横断している。こうした操作的景観は、一般に巨大な人口重心地に結びつけられている人口密度、居住特性、社会構造、インフラストラクチャー施設を含まないかもしれないが、第一次原料、エネルギー、飲料水、食料、労働を供給することによって、あるいは、物流、コミュニケーション、生態系、廃棄物処理といった機能を通じて、この人口重心地を支えるのに長い間戦略的に重要な役割を果たしてきたのである。

今日、このような景観は、前例のない巨大な投資の急増、土地の囲い込み、広大なスケールでの領土の開発戦略を通して徹底的な創造的破壊を被っている。なぜなら、これらの戦略は、しばしばグローバルな商品価格の変動に対する投機的な反応として国境横断的に調整されており、その結果、世界のあらゆる場所における集積の加速的な成長を支えるように計画されているからである^{原注20}。したがって、こうした発展のリズムと政治的生態は、世界の空間的分業と資金循環を通じた主要な都市中心地のそれと直接に結びつけられる。また、こうした絶えざる商品化、囲い込み、社会環境の悪化は、「農村から都市へ」の人口推移という見出しのもとで現在主流となっている都市政策の言説のなかでたいてい無批判に列挙されるか、時には賛美されることもある、大規模な収奪や強制退去の形態の直接的な一因となっている^{原注21}。結果として、実際に私たちが現在「都市の時代」を生きているとするならば、この状況は、グローバル・シティ、大都市圏、メガ・シティ圏、世界の都市間ネットワークとの関連のみで探求されるのではない。産業的な都市開発の過程を加速化し、強めることに寄与し、甚だしく不均等かつ投機的で矛盾をはらみながらも進行する、地表、地下、流域、大洋、大気圏といった空間を含む地球全体の操作との関連で探求されなければならないのだ。資本主義的な都市化の支配的なモデルが、主要な都市中心地から遠く離れて位置する地帯に典型的に見られる化石燃料の採取、生産、消費に基づいたものであるかぎり、このモデルは、地球の土壌、大洋、河川、大気に前例のない汚染と有毒廃棄物を浸透させながら、たえず地球の気候を変化させるようなグローバルな生態系の略奪形態に直接的な関係をもっているのである。

革命再考

したがってこの視点に立てば、都市的なものに対する形態学的に単一なアプローチ、つまり人口に焦点をあてたアプローチでは、プラネタリー・アーバンゼーションをつき動かす新しい、不均等かつまだら状に変化する動態に関して一面的な理解しか得ることができないのである。この過程は、世界的な巨大都市における急激な人口成長を参照することによって適切に理解されるわけではないし、単に地上にある都市のような居住類型の再現としても理解され得ない。他方で、後背地、あるいは農村的なものについての伝統的な観念が、社会空間、金融、エコロジーの変化過程を把握できるわけでもない。この過程を通じて、かつて周辺にあって隔てられていた空間は、囲い込まれ、操作の対象となり、インフラ整備がなされ、再設計され、世界の巨大都市地域における社会経済的活動の絶えざる集積を支えるのである^{原註22}。ここでは、都市化の新たな理解が必要とされている。それは、土地利用の集中、インフラストラクチャーの拡大、社会的な新陳代謝の変化、物流の調整、金融投機、加えてあらゆるスケールでこの金融投機に伴う土地の再デザインをはらんだ、集積過程とその操作的景観との相互に再帰的な関係を探求する都市化の理解である。こうした理解においては、資本主義の発展、集中、世界への拡大は、広範囲にかつ極度にまだら状に広がる領域としての都市化の様々な条件を産み出す。こうした条件には、都市研究者の関心を長いあいだ占めてきた集積地が含まれるが、しかし徐々にそれを超えて拡張する。こうしてかつて都市ではなかった領域が、資本主義の都市化の不均等でありながらも世界を囲い込む過程のうちに徐々に包摂され、またそれによって操作されるがゆえに、都市的なものの性質は、理論においても実践においても、根底的に描き直され、調査し直されなければならないのである。

クリスチャン・シュミットとの共同作業のなかで、こうした課題に立ち向かう私自身の最近の試みは、高密度の都市化と広範囲の都市化という主要概念の区分にかかっていた。高密度の都市化 (Concentrated urbanization) は、比較的密度の高い集積地 (都市、都市地域、メガロポリス、大都市圏といったもの) の絶えざる編成と再編成に関わるものである。簡潔に言えば、高密度の都市化の地理は、都市研究者が都市の領土的組織の度重なる歴史的編成に関連して伝統的に理解し視覚化してきた、都市、都市圏、大都市圏の地理とほぼ同じものである。こうした地理は、

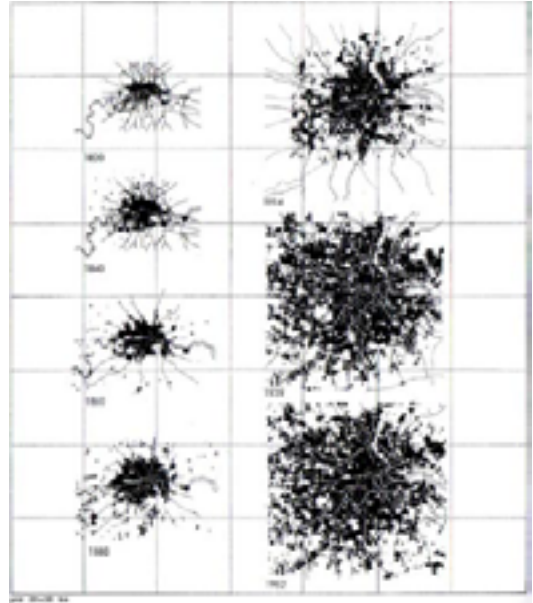


図2 ロンドンを例とした高密度の都市化のスケールの拡大。
コンスタンティノス・ドキシアディス作

図2の中で図式的に説明されている。

図は、1960年代からコンスタンティノス・ドキシアディス [1913-1975、ギリシャの都市計画家] によって作成された一連の地図で、それは二世紀にわたってロンドンの集住の領土的規模が拡大してきたことを描写している。この図が示すように、大都市から見ると、はっきりとした分散化の傾向によって、都市景観を超えて徐々に拡大するスケールでの集積過程の領土的確立がしばしばもたらされる。場に特化したものだとはいえ、高密度の都市化による同様のダイナミズムが、19世紀以来、世界中の都市化の景観に刻まれてきた。近代の都市形式に関する膨大な文献は基本的に、異なる時代区分や地理的文脈における高密度の都市化に関する多彩な形態学に着目してきたのである。

これとは対照的に、広範囲の都市化 (extended urbanization) は、広範囲の操作的景観——資源採取、物流とコミュニケーション、エネルギーと食料生産、水の供給と管理、廃棄物処理と環境計画のためのインフラストラクチャーを含む——の産出や、その絶えざる再編成を指し示す。こうした景観は、都市集積のダイナミズムを支えると同時にそこから産み出される^{原註25}。広範囲の都市化は、農村、田舎、後背地——都市のための周知の供給地や廃棄物処理場——といった分類のもとで都市理論家によってたいてい無視されるか「ブラック・ボックス」とされて

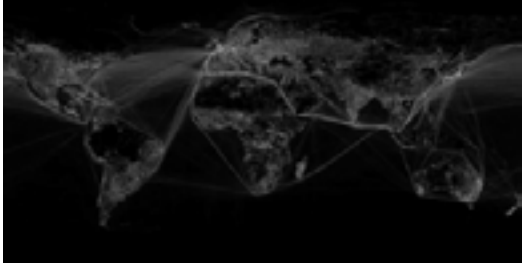


図3 世界規模における道路、鉄道、海路による輸送ネットワークによる新しい都市の織り目。

ニコス・カツイクス作

きた。しかし、ごみの風景 (drosscapes)、曖昧な領域 (terrains vagues)、都市のあいだ (Zwischenstädte)、メタポリス領域、水平的都市化、穴のある平面、都市と村の混合地域 (desakota)、静寂地域、休耕地帯、境界域の風景、乱掘 (Abbau) といった活発に変容する領域は、ながらく資本主義下の都市過程に統合されてきた。ここ数十年のあいだに、広範囲の都市化のこうした景観は、経済学、地政学、生態学の観点から徐々に戦略的なものになっている^{原注27}。きわめて注目すべきことに、この景観がまた最近になって、伝統的に定められた都市の境界を越えて拡がる社会、建築、インフラストラクチャー、物質などの様々な条件に取り組みようとするデザイナー達にとってかつてない重要性を獲得したことである^{原注28}。目下進行中の研究のためには、ニコス・カツイクスによる世界の交通インフラの視覚化が、こうした多彩な接続とプラネタリー・アーバニゼーションの動態に対するその体系の重要性を解釈するための表象戦略のひとつを提供してくれている (図3)。

高密度の都市化と広範囲の都市化とを分けることによって、現代の諸条件のもとで急速に変容する都市的なものの地理学を概念化し直すための有益な分析の基礎が与えられると私たちは信じている。この区分はまた、ルフェーヴルによる都市革命という古典的仮説を歴史的にも現代的にも探求する視座をも与えてくれる。高密度の都市化の観点からは、グローバル・シティの理論家や経済生活における都市の役割についての最近の解説者が主張したように^{原注29}、都市革命は空間的拡張と主要な大都市圏が有する戦略的重要性を増大させる。しかし、広範囲の都市化という問題設定を考察することで、ルフェーヴルの都市革命という観念を、より空間的に多彩で、領域的に分化した多様なスケールで概念化する作業を始めることができる。ルフェーヴルの考えが、プラネタリー・アーバニゼーションの新たな形態を解釈、調査、視覚化するために重要だと私たちは考えてい

る。

この観点から、現代の都市革命はまた、世界経済という広範な領域における都市集積とそれによる操作的景観との新たな関係を確立する。操作的景観は、もはや単なる資源供給地や「後進」地域、都市成長のための輸送拠点や廃棄物処理場——「乱掘 (Abbau)」や、ルイス・マンフォードが1960年代初めに警戒心を募らせて観察した地球生態系の低下の領域^{原注30}——としては機能していない。そうではなく、現在、広範囲の都市化による操作的景観それ自体が、より組織的に囲い込まれ、産業化され、インフラ整備や金融化の対象となり、相互接続され、管理されつつある。その結果、それは、急速に変容する地球の都市システムにおける広範囲の空間的分業や不安定な地政学的生態のなかで、特定の機能的な目的を果たすのである。このように歴史的に受け継がれた後背地は、急激に資本化、金融化、多国籍化され、地政学上の戦略の一部となり、生態学的には監視される操作的景観へと継続的に変化している。この変化が、現在進行している地球の都市革命に見られる際立った傾向のひとつを現しているのである。

地球に広がる都市的なもの (プラネタリー・アーバン) の視覚化

認識論や地図作成の領域に対して爆弾のような発言内容を有するにも関わらず、ルフェーヴルの『都市革命』で——フランス語原書版 (1970年) のみならず英訳版 (2003年) でも——表紙に用いられたイメージは、驚くほど型にはまったものである (図4)。

フランス語原書版では、都市の密度に関する古典的なイメージが採用されている。すなわちそれは、高架化された地下鉄の列車に貫かれた大きく象徴的なビル群のコラージュである。より最近の英訳版では、もっと平易にわかるかたちで、同様のイメージが選ばれている。そこに映るのはオスマンによるパリの大通りのイメージで、それは、地平線の彼方にまで伸びる密集した都市景観の構造にナイフで切り取ったような切断面を作り出している。

とりわけ、プラネタリー・アーバニゼーションの新たな景観に見られる多面的でまだら状に移り変わる性格に私が力点を置いてきたことに照らしてみると、単一の純粋に象徴的なイメージやジャンル、地図作成法を通して、こうした景観を表象しようとすることは明らかに賢明であるとは言えない。それでも、都市的なものに対するこれまでのアプローチが、



図4 表紙イメージ。

アンリ・ルフェーヴル『都市革命』（1970年版と2003年版）



図5 タール・サンドの資源採掘の産業化された風景。
ガス・レンツ作

「いわゆる」都市を社会生活の単位として自然化する視覚のイデオロギー——例えば、垂直、密集、空間的境界などの視覚のイデオロギー——に依拠する状況において、批判的かつ再帰的に対抗的な視覚化（*conter-visualizations*）を行うことで、視覚のイデオロギーを揺さぶり、最終的にはそれを乗り越えて、都市化の新たなパターンや経路に関するこれまでとは別の解釈を展開するための重要な基礎を提供できるかもしれない。こうした試みに関連して追求されるような多くの対抗的な視覚化の戦略の中でも、産業化された資源採取の巨大な風景に関する最近の写真作品——例えば、エドワード・バーティンスキー、ガス・レンツ、デヴィッド・メイゼルによる写真——は、特に効果的な一連の介入を表している^{原注32}。

きわめて広く普及した多くのこうした風景イメージの中で、世界で進行する環境破壊に対する恐るべき見通しは、幾人かの評論家が「毒のある崇高」や「黙示録的な崇高」^{原注33}といった表現を用いてこの分野を表現したように、美学的な抽象を多く含むようなかたちで描写される。ガス・レンツによるカナダのオイルサンドに関する注目すべき一連の写真（図5）を通して私たちは、いかにも都市らしい巨大で密集した垂直的な景観から遠く離れて、地表が粘性の高い汚泥で覆われ、泥まみれの道によって切り開かれ、その道が膨大に詰め込まれた有毒廃棄物でいっぱいになった池の周りに絡まるように続く地帯へと連れて行かれる。

つまり、これらのイメージは、広範囲の都市化による社会的にも生態学的にも破滅的な操作的景観に関する劇的で不穏で人を不安にさせるような視

覚を表すのである。ルフェーヴルであれば、「大地殺し」と描写したこうした風景は、21世紀初頭における資本主義下の都市生活を支え、再生産するために、まさに驚くべきスケールで築き上げられ続けているのである^{原注34}。

タール・サンドに関するレンツの予知的イメージは、現在、地球を覆っている都市状況を読み解くような批判的な視座を与えてくれるだろうか。オスマンの幾何学的な街路が、資本の都市化に向けて建造環境が作られるために都市住民が市街地から立ち退くことを迫った、初期の都市拡張における市街地の編成に関する象徴を与えているのだとすれば、おそらく、産業化による大地の破壊に関するレンツの航空写真は同様に、プラネタリー・アーバンゼーションの下で解き放たれたネオ・オスマン化の世界的な様式を喚起するメタファーを提供しているのかもしれない^{原注35}。立ち退き、囲い込み、土地の剥奪は続く。だが、それは今や全地球のスケールにおいて、初期の都市開発から引き継がれた建造環境をはるかに超えて継続し、前代未聞の社会的荒廃や毒物汚染、そして環境破壊を引き起こしているのである。アンディ・メリーフィールドは以下のように述べる。

オスマン男爵はパリ中心部へと侵攻し、古くからの近隣と貧民を攻撃した。都市の中心へと投機する一方で、貧民を周辺へとおいやったのである。こうして建造された都市形式は、不動産マシーンと化し、同時に、分断と支配のための手段と化した。こんにちのネオ・オスマン化もまた、金融・企業・国家の利害を統合し、地球を蝕んでいく過程である。強制的なスラム・クリアランスと取用によっ

て土地を差し押さえ、かつての住民をポスト工業の停滞に喘ぐグローバルな後背地へと追いやっては、その土地を売りに出していく^{原注36}。

こうした状況下でかつてないほどに差し迫ったものとなっているように思われる課題は、現代のかつグローバルな都市の条件に関する私たちの理解のうちにはっきりと中心的な主題としてこの操作的景観——この景観にある土地利用システムやインフラストラクチャーの配置、労働レジームや所有関係、統治形態、生態学的影響、そしてそれが急速に変化させる社会構造——を位置づける新たな理論、分析、地図作成を進展させることである。プラネタリー・アーバニゼーションに関する私たちの研究が提起する認識論的視座は、都市的なものの新たな理解が継続して行われる闘争に有益であるかもしれないという希望のもと、深められた。そうした闘争とは、ネオ・オスマン化、土地の囲い込み、市場原理主義、グローバルなエコロジック的篡奪に対する闘いであり、それは異なる都市化のモデル、すなわち、「人間という種の作品としての地球の空間」を集団的に領有し、民主的に管理することを目指して方向づけられたアルター・アーバニゼーションを求めて、行われるのである。

原注

原注1 Robert Park and Ernest Burgess, eds., *The City* (Chicago: University of Chicago Press, 1967 [1925]).

原注2 (2) この点に関する詳細な展開については以下を参照。Neil Brenner and Christian Schmid, "Towards a New Epistemology of the Urban," *CITY* 19, no. 2-3 (2015): 151-82. 同様に以下を参照。Neil Brenner, ed., *Implosions/Explosions: Towards a Study of Planetary Urbanization* (Berlin: Jovis, 2014).

原注3 Jean Gottmann, *Megalopolis* (New York: The Twentieth Century Fund, 1961), 5.

原注4 Henri Lefebvre, *The Urban Revolution*, trans. Robert Bononno (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2003), 1. (=1974、今井成美訳『都市革命』晶文社。)

原注5 以下を参照Henri Lefebvre, "The Right to the City," in *Writings on Cities*, ed. and trans. Eleonore Kofman and Elizabeth Lebas (Cambridge, MA: Blackwell, 1996), 69-72 (=2011、森本和夫訳『都市への権利』ちくま学芸文庫。); Lefebvre, *Urban Revolution*, 1-23 (=『都市革命』、同上。); Henri Lefebvre, "Reflections on the Politics of Space" (=1975、今井成美訳『空間と政治』晶文社。) and "The Worldwide Experience," in *State, Space,*

World-Selected Writings, ed. Neil Brenner and Stuart Elden (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2009), 190, 278.

原注6 Lefebvre, "Right to the City," 71 (=『都市への権利』、同上。); Lefebvre, *Urban Revolution*, 1-23. (=『都市革命』、同上。)

原注7 Lefebvre, *Urban Revolution*, 4. (=『都市革命』、同上。)

原注8 Henri Lefebvre, "Dissolving City, Planetary Metamorphosis," in Brenner, *Implosions /Explosions*, 566-71. (本誌掲載論文「地球の変貌」参照。) 論考の初出は、「都市が地球の変貌のうちに見失われるとき」という題で、1989年5月に『ル・モンド・ディプロマティック』に掲載された。

原注9 例として以下を参照。Brenner, *Implosions/Explosions*; Lukasz Stanek, Christian Schmid and Akos Moravanszky, eds., *Urban Revolution Now: Henri Lefebvre in Social Research and Architecture* (London: Ashgate, 2014); David Madden, "City Becoming World: Nancy and Lefebvre on Global Urbanization," *Environment and Planning D: Society and Space* 30, no. 5 (2012): 772-87; and David Harvey, "Lefebvre's Vision," in *Rebel Cities: From the Right to the City to the Urban Revolution* (London: Verso, 2013), ix-xviii. (=2013、森田成也・大屋定晴・中村好孝・新井大輔訳『反乱する都市』作品社。)

原注10 Andy Merrifield, "The Right to the City and Beyond: Notes on a Lefebvrian Conceptualization," in Brenner, 523-32. (本誌掲載論文「都市への権利とその彼方——ルフェーヴルの再概念化に関するノート」参照。)

原注11 都市化過程のメタポリズムの次元に関しては以下を参照。Erik Swyngedouw, "Metabolic Urbanization: The Making of Cyborg Cities," in *In the Nature of Cities: Urban Political Ecology and the Politics of Urban Metabolism*, ed. Nik Heynen, Maria Kaika and Erik Swyngedouw (New York: Routledge, 2006), 21-40; Daniel Ibañez and Nikos Katsikis, eds., *New Geographies 6: Grounding Metabolism* (Graduate School of Design, Harvard University, 2014). 世界の資本主義的発展における一次産品の生産の重要性については以下を参照。Jason W Moore, *Capitalism in the Web of Life* (New York: Verso, 2015); and Stephen G. Bunker and Paul S. Cicantell, *Globalization and the Race for Resources* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2005).

原注12 以下を参照。Brenner and Schmid, "Towards a New Epistemology of the Urban"; 同様に以下を参照。Jennifer Robinson, "New Geographies of Theorizing the Urban: Putting Comparison to World for Global Urban Studies," in *The Routledge Handbook on Cities of the Global South*, ed. Susan Parnell and Sophie Oldfield (New York: Routledge, 2014), 57-70; and Ananya Roy,

- "Worlding the South: Towards a Post-Colonial Urban Theory," in Parnell and Oldfield, *The Routledge Handbook on Cities of the Global South*, 9-20. 認知地図の概念は、ケヴィン・リンチの読解を通して、ジェイムソンによって発展させられた。Frederic Jameson, "Cogmitive Mapping," in *Marxism and the Interpretation of Culture*, ed. Lawrence Grossberg and Cary Nelson (Chicago: University of Illinois Press, 1992), 347-57. (=1995、太田晋訳「認知地図」『10+1』No3、74?84.)
- 原注13 こうした議論の古典的な定義は次の文献による。Melvin Webber, "The Post-City Age," *Daedalus* 94, no.4 (1968): 1091-110. (=1968、「脱都市時代」、マーティン・マイヤーソン(編)、鈴木二郎・林二郎他訳『脱都市時代』鹿島出版会。)より最近のもの批判的論評に関しては以下を参照。Stephen Graham, "The End of Geography of the Explosion of Place: Conceptualizing Space, Place and Information Technology," *Progress in Human Geography* 22, no. 2 (1998): 165-85.
- 原注14 Matthew Gandy, "Where Does the City End?," in Brenner, *Implosions/Explosions*, 86.
- 原注15 David Harvey, "Cities or Urbanization," in Brenner, *Implosions/Explosions*, 61.
- 原注16 Kingsley Davis, "The Origins and Growth of Urbanization in the World," *American Journal of Sociology*, 60, no. 5 (1955): 429-37.
- 原注17 Kingsley Davis, *World Urbanization: 1950-1970, Volume : Analysis of Trends, Relationships and Development*, Population Series no.9 (Berkeley: Institute of International Studies, University of California, 1972); Kingsley Davis, *World Urbanization: 1950-1970, Volume I: Basic Data for Cities, Countries, and Regions*, Population Monograph Series no. 4 (Berkeley: Institute of International Studies, University of California, 1969).
- 原注18 以下を参照。Neil Brenner and Christian Schmid, "The 'Urban Age' in Question," *International Journal of Urban and Regional Research*, 38, no.3 (2015): 731-55.
- 原注19 以下を参照。Christian Schmid, "Specificity and Urbanization: A Theoretical Outlook," in *The Inevitable Specificity of Cities*, ed. ETH Studio Basel (Zurich: Lars Müller Publishers, 2014), 282-97; Ananya Roy, "The 21st Century Metropolis: New Geographies of Theory," *Regional Studies* 43, no.6 (2009): 819-30; and Robmson, "New Geographies of Theorizing the Urban."
- 原注20 以下を参照。Martin Arboleda, "Financialization, Totality and Planetary Urbanization in the Chilean Andes," *Geoforum* 67 (2015) : 4-13; Martin Arboleda, "In the Nature of the Non-City: Expanded Infrastructural Networks and the Political Ecology of Planetary Urbanisation," *Antipode* 48, no.2 (2016): 233-51; and Mazon Labban, "Deterritorializing Extraction: Bioaccumulation and the Planetary Mine," *Annals of the Association of American Geographers* 104, no. 3 (2014): 560-76.
- 原注21 以下を参照。Max Ajl, "The Hypertrophic City versus the Planet of Fields," in Brenner, *Implosions/ Explosions*, 533-50; Timothy W. Luke, "Global Cities versus 'global cities': Rethinking Contemporary Urbanism as Public Ecology," *Studies in Political Economy* 70 (Spring 2003): 11-33; and Luke, "Developing Planetary Accountancy: Fabricating Nature as Stock, Service and System for Green Governmentality," *Nature, Knowledge and Negation* 26 (2009), 129-59.
- 原注22 以下を参照。Chapter 13 in the present volume.
- 原注23 詳細な展開に関しては以下を参照。Brenner and Schmid, "Towards a New Epistemology of the Urban"; Brenner and Schmid, "The 'Urban Age' in Question"; and the contributions to Brenner, *Implosions/Explosions*.
- 原注24 例えば以下の古典的な総合を参照。Edward Soja, *Postmetropolis: Critical Studies of Cities and Regions* (Malden, MA.: Blackwell, 2000). より包括的な歴史概略として以下を参照。Paul Bairoch, *Cities and Economic Development: From the Dawn of History to the Present*, trans. Christopher Braider (Chicago: University of Chicago Press, 1988).
- 原注25 広範囲の都市化の概念は、最初にロベルト＝ルイ・モンチ＝モルによって、ブラジルのアマゾンにおける産業化された都市空間とネットワークの生産の研究で使用したものである。この用語は、続いて最近でもリージョナル・アーバニゼーションの研究のなかでエドワード・ソジャによって用いられた。別のヴァリエーションとしては、東南アジアにおける都市と村の混合領域 (desakota) に関する先駆的な研究のなかでテリー・マギーが発展させたものがある。これらの著者と他の著者による広範囲の都市化に関する主要テキストは、次の文献に収められている。Brenner, *Implosions/ Explosions*. 私たちは、こうした文献に強く着想を得ているが、本稿で定義したような特殊な用語として広範囲の都市化の観念を用いている。この使用法は、モンチ＝モルの使用法に最も近いものであるが、というのも、彼の初期の概念作業を私たちが発展させた認識論的かつ概念的枠組みに組み込んでいるからである。
- 原注26 こうした用語のいくつかは、以下の文献で論じられ、深められている。Alan Berger, *Drosscape: Wasting Land in Urban America* (Pnncton, NJ: Pnncton Architectural Press, 2006); Patrick Barron and Manuela Mariani eds., *Terrain Vague: Interstices and the Edge of the Pale* (New York: Routledge, 2013); Thomas Sieverts, *Cities without Cities: an Interpretation of the Zwischenstadt* (London: Routledge, 2003); François Ascher, *Métapolis Ou l'avenir des villes* (Paris: Editions Odile Jacob, 1995); Lars Lerup, *After the City* (Cambridge, MA.:MIT Press, 2001); Norton Ginsburg,

- Bruce Koppel and T. G. McGee, eds., *The Extended Metropolis: Settlement Transition in Asia* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1991); and Roger Diener, Jacques Herzog, Marcel Meili, Pierre de Meuron and Christian Schmid, *Switzerland? An Urban Portrait*, 4 vols. ed., ETH Studio Basel (Basel: Birkh?user, 2006). 資本主義的な産業発展のためのメタポリズム的かつ生態的前提条件に関しては以下を参照。Moore, *Capitalism in the Web of Life*; and Bunker and Ciccantell, *Globalization and the Race for Resources*.
- 原注27 以下を参照。Arboleda, "In the Nature of the Non-City"; Labban, "Deterritorializing Extraction"; Luke "Global Cities vs. 'global cities'"; and Chapter 13 in the present volume.
- 原注28 都市化の作業現場 (operational territories) に対するデザイナーの関心の増大が、他の事例の中でもとりわけ範例的に示されているのは、建築設計事務所OMAによる北海のエネルギー施設の未来図に関する研究 (<http://www.oma.com/projects/2008/zeekracht/>)、北極でのラテラル・オフィスのプロジェクト (<http://lateraloffice.com/NEXT-NORTH-2011>)、サブトラクションの地政学に関するケラー・イースタリングの研究 (<https://www.domusweb.it/en/architecture/2012/12/05/the-geopolitics-of-subtraction.html>)、それに石油と資源採掘の都市の様式に関するニラジ・パッチェア、フェリーピ・コレア、アナ・マリア・ドゥラン・カリストラの様々な発言 (例として以下を参照。 <http://www.petropia.org/publications/articles/>)である。以下も参照。Charles Waldheim and Alan Berger, "Logistics Landscape," *Landscape Journal* 27 (2008): 2-8; 同様に以下を参照。Neeraj Bhatia, "The Cheap Frontier: Operationalizing New Natures in the Central Valley," *Scenario Journal* 5, Fall (2015): <http://scenariojournal.com/article/the-cheap-frontier/>.
- 原注29 例えば以下を参照。Michael Storper, *The Regional World* (New York: Guilford, 1996); Alien J. Scott ed., *Global City-Regions* (New York: Oxford University Press, 2001) (=2004、坂本秀和訳『グローバル・シティ・リージョンズ』ダイヤモンド社)、Peter J. Taylor, *World City Network: A Global Urban Analysis* (New York: Routledge, 2005); Edward Glaeser, *Triumph of the City* (New York: Trantor, 2011) (=2012、山形浩生訳『都市は人類最高の発明である』NTT出版。)。説得力ある批判として以下を参照。Brendan Gleeson, "The Urban Age: Paradox and Prospect," *Urban Studies* 49, no. 5 (2012): 931-43.
- 原注30 Lewis Mumford, "Mechanization and Abbau," in *The City in History* (New York: Harcourt, Brace, 1961), 450-52. (=1969、「機械化と乱掘」生田勉訳『歴史の都市明日の都市』新潮社、371?372頁。)
- 原注31 この変容を明らかにするためには、都市設計家、ランドスケープ・アーキテクト、そして産業的採掘、農業、物流、森林管理や政治的生態に関わる学者たちの間でのさらなる共同研究が要請される。こうした対話に着手した最近の有益な研究として以下を参照。Arboleda, "Financialization, Totality and Planetary Urbanization"; Labban, "Deterritorializing Extraction"; Luke, "Global Cities vs. 'global cities'"; and Luke, "Developing Planetarian Accountancy."
- 原注32 一連の作品に関する有益な概説として、とりわけパーティンスキーの写真に関しては以下を参照。Merle Patchett and Andriko Lozowy, "Reframing the Canadian Oil Sands," *Imaginations: Journal of Cross-Cultural Image Studies* 3, no. 2 (2012); 140-69. 批判的評論を兼ねた、デヴィッド・メイゼルの作品に関する説得力のある説明は、以下の彼の注目すべき著作に見出される。David Maisel, *Black Maps: American Landscape and the Apocalyptic Sublime* (Göttingen: Steidl, 2013). レンツの作品に関する良質の概説は次の文献にある。Becky Harlan, "Garth Lenz's Abstract Energyscapes," *National Geographic Online*, August 29, 2014: <http://proof.nationalgeographic.com/2014/08/29/garth-lenz-abstract-energyscapes/>.
- 原注33 この議論に関しては以下を参照。Patchett and Lozowy, "Reframing the Canadian Oil Sands."
- 原注34 ルフェーヴルの大地殺しという観念については以下を参照。Stuart Elden, "Terricide: Lefebvre, Geopolitics and the Killing of the Earth," Department of Politics, University of Warwick, unpublished manuscript, 2013.
- 原注35 「ネオ・オスマン化」について以下を参照。Merrifield, "The Right to the City and Beyond." (本誌掲載論文「都市への権利とその彼方ールフェーヴルの再概念化に関するノート」参照。)
- 原注36 Ibid., 526.
- 原注37 Henri Lefebvre, "The Worldwide and the Planetary," in *State, Space, World: Selected Essays*, ed. Neil Brenner and Stuart Elden (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2009), 206.